

【東京】最後の砦を堅持し、「柔らかな松沢」目指す-布村明彦・東京都立松沢病院院長に聞く ◆Vol.2

身体合併症の治療経験生かし、総合診療医育成事業に参画

2025年8月27日（水）配信 m3.com地域版

「公立病院として、誰一人取り残さない最後の砦であり続けたい」。2025年4月に東京都立松沢病院（世田谷区）の第20代院長に就任した布村明彦院長はこうに病院の使命を話す。警察経由の措置入院や夜間休日を問わない緊急措置入院、身体合併症の治療を行っている特徴に加え、2024年には都内初となる摂食障害支援拠点病院に指定され、総合診療医の育成事業にも参画した。布村氏に、同院の特徴と目指す病院像を聞いた。（2025年6月23日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



布村明彦氏（本人提供）

——布村先生は2025年4月に東京都立松沢病院の院長に就任しました。病院の特徴をどう考えていますか。

当院の詳細は、第18代院長の齋藤正彦先生が取材で語ってくれています（『担当地域380万人を支える東京都南部・島しょ部精神科医療の現状—東京都立松沢病院院長の齋藤正彦氏に聞く◆Vol.1』を参照）。その上で、現在の状況を踏まえて要約すると、最も大きな柱が二つあります。一つが、公の病院として行き場を失うような患者さんをつくらないこと、誰一人取り残さない、最後の砦であり続けることです。これはつまり、当院が行っている精神科スーパー救急の中でも、一般の単科精神科病院や総合病院では受けられない警察経由の措置入院や、とりわけ緊急性が高く夜間休日を問わない緊急措置入院を受け入れていることを意味します。その中には、外国人の患者さんも含まれます。

もう一つが、精神疾患と身体疾患を併せ持つ「身体合併症」の治療です。当院では1981年から行っている一方、現在も一般的な病院では内科的・外科的な治療が必要な精神疾患患者さんへの対応は難しいため、その受け皿となっているのが特徴です。

専門的治療に強み、医療観察法病棟も運営

——松沢病院ではそのほか、複数の専門的な治療にも強みがあるといいます。

その面で挙げたいのが、認知症や依存症、思春期・青年期への医療です。この三つの分野はいずれも東京都の拠点病院あるいはセンターとして機能しています。具体的には、認知症疾患医療センター、依存症専門医療機関・依存症治療拠点機関、摂食障害支援拠点病院に指定されています。

そして、医療観察法病棟を運営していることも他院にはない特徴です。これは、精神症状のために重大な他害行為を行った人を治療し、社会復帰を目指すもの。各都道府県に1カ所あるかないかという状況の中、東京都ではNCNP病院（国立精神・神経医療研究センター）と当院の2院が国から指定されています。こちらも、「誰一人取り残さない」ことを目指す公立病院として重要な役割です。

——**摂食障害支援拠点病院に指定されたのは2024年7月であり、都内では初です。**

同拠点病院は摂食障害患者さんの早期発見・早期受診を目指して国が設置を進めており、摂食障害に関する相談窓口の機能を有します。当院では現在、看護師と精神保健福祉士、公認心理師が週に3日、患者さんやご家族、医療・保健福祉・学校関係者を対象に電話相談に応じています。

摂食障害治療における当院の強みは、先に挙げた身体合併症の治療を行っていることと関係します。摂食障害はあるステージでは死の危険を伴うため、身体の治療が優先される場合は当院の内科医が精神科医と連携しつつ主体的に関わっています。

都立病院機構の総診療育成事業「T-GAP」に参画

——**近年のトピックとしては、教育面でも動きがあったそうですね。**

当院の母体・東京都立病院機構が行っている「東京総合診療推進プロジェクト（T-GAP）」の研修施設になりました。これは、同機構が総合診療医を育てようと2023年に立ち上げたもので、当院は2024年に参画しました。大都市・東京には多世代が密集しており、外国人居住者も多いほか、奥多摩などの山間部や11の有人離島もあるなど、実は地域性も多様です。そこで、患者さんの年齢やフィールドを問わずトータルに対応できる総合診療医の育成を進めています。

研修施設としての当院の強みは、やはり精神と身体の両方を診られることです。身体合併症の豊富な診療経験を教育に生かせるため、精神科医療をもっと学びたい総合診療医や、逆に精神科専門医で身体疾患を診られるようにしたい医師などの学びの場となっています。

——**病診連携や地域住民に向けての取り組みはいかがでしょうか。**

院長就任後、世田谷区医師会には何度も足を運びました。同医師会内の世田谷区精神科医会はとても仲が良く、すぐに会食を設けていただけたのはうれしかったですね。精神科クリニックが担当患者さんの入院手配をスムーズに行えるよう、先生方には当院の救急当番医に直接つながる電話番号（ホットライン）を伝え、時間帯を問わず対応させていただく旨を共有しました。同医会では毎月、オンラインミーティングも行っています。

他方、精神科以外の先生方に向けては、当院が保有する医療機器を通常診療にご活用いただけることをご案内しました。当院は精神科以外にも多くの診療科を標榜しているため、単科の精神科病院よりも機器が多く、3テスラMRIなどの稼働率にはまだ余裕があります。世田谷区医師会の窪田美幸会長の許可を得て、2025年5月に周辺の約700施設に伝え、現在、少しずつ利用されてきています。

地域に向けては、精神科病院に抱かれがちな心理的ハードルを下げたい思いがあります。当院には東京ドーム4個分の広大な敷地があり緑も豊かなので、恵まれた自然環境を生かして地域の方を招いた院内ウォークラリーなどのイベントを定期開催していく予定です。そして、災害対応も重要です。東京都立病院機構がこれを進めており、当院は加盟病院の中で土地建物の拠点に位置付けられています。大災害・パンデミックに向けた準備を怠らないよう取り組んでいく考えです。

入職後に感銘「スタッフの気概を感じた」

——最後に、目指す病院像を改めてお聞かせください。

「柔らかな松沢」を目指したいです。先に挙げた特徴を実践していくと、どうしても患者さんの行動を制限する機会は生じます。ともすればそれによって当院に偏ったイメージが生まれてしまう恐れがありますが、行動制限はあくまでも患者さんを一時的に守るためのものであり、現場では最小限にしようと努めています。私がこちらに来て素晴らしいと思ったのは、先生方やスタッフの皆さんが公の医療を意識して、「誰も取り残さない医療を行っていこう」と気概を持ち、仕事に臨んでいることです。

先生方の薬の使い方を見てもマイルドであり、行動制限などを行う際も患者さんになるべくトラウマを残さないよう配慮してくださっています。行政的医療を堅持しつつ、柔らかな松沢を追求すること。全スタッフ、患者さん、地域の人と一緒に実現したいと思います。

◆布村 明彦（ぬのむら・あきひこ）氏

1986年旭川医科大学医学部卒。1991年同大学院修了。米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学への留学を経て、2004年同学部精神医学講座助教授。2008年山梨大学医学部精神神経医学講座准教授。2018年東京慈恵会医科大学精神医学講座准教授、2019年同講座教授。2025年4月から東京都立松沢病院院長。日本老年精神医学会理事、日本認知症学会理事など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

